



最優秀賞

設計部門



グランモール公園再整備

横浜市の大規模ウォーターフロント再開発であるみなとみらい21地区。その先陣を切って1989年に供用開始されたグランモール公園は長く「都市の軸」として市民に愛されていたが、およそ四半世紀を経て公園施設の老朽化に加え、隣接敷地に多くの建物が竣工したことによる周辺土地利用の変化、「横浜みどりアップ計画」等の横浜市の取組もあって再整備が実施された。「Rambling Park ～歩行者軸を超え、憩いと賑わいのあふれる公園へ～」を計画コンセプトとした。この公園の重要な特徴は、約700mの全長にわたって様々な用途の建築敷地に接していること。道路に四方を囲まれながら都市の中で独立して存在するのではなく、そこにアプローチするには隣接する美術

館、商業施設、住宅を介することが前提の公園である。そこで計画にあたってはパブリック領域（公園）とプライベート領域（隣接敷地）の接点に中間領域として「テラス」を設定するという基本構成を採用した。様々に展開する「テラス」空間は、今までの「軸」とは異なる「場」を提供している。人々をそぞろ歩きへ誘うことで屋外のパブリック空間の価値を発見し、それこそがこれからの街をこの公園が牽引する原動力になると考えた。また、広場の中心であり、東西のペDESTリアンネットワークとの結節点を「プラザ」、街区全体を貫く水紋の舗装パターンを施した中央の主動線を「モール」と設定し、バラバラに存在していた4つの広場に対して「グランモール公園」の

株式会社三菱地所設計
植田 直樹・津久井敦士

作品概要

作品名—— グランモール公園再整備
所在地—— 神奈川県横浜市西区みなとみらい 三丁目
発注—— 横浜市環境創造局公園緑地整備課
設計—— 株式会社三菱地所設計
設計協力—— 株式会社スタジオゲンクマガイ 熊谷玄、伊藤祐基、渡邊聡美
株式会社トミタ・ライティングデザイン・オフィス 富田泰行、南雲祐人
施工—— 《美術の広場地区：第1期》
[修景施設等]サカタのタネ・田口園芸JV、[園地整備その1]濱田園・アライグリーンJV、[電気設備工事その1]清進・浜川JV、[機械設備工事その1]金子モリヤ特別JV、[高圧受配電設備工事]新興電設工業
《美術の広場地区以外：第2期》
[園地整備その2]濱田園・泰山園JV、[園地整備その3]横浜植木[電気設備工事その2]京浜電設、[機械設備 工事その2]興和工業
設計期間—— 2012年10月～2105年3月
施工期間—— (第1期)2015年4月～2016年3月/(第2期)2016年3月～2017年1月
規模—— 23,102㎡(公園全体)
主要施設—— 広場、植栽、芝生、水盤、噴水、ベンチ、サイン、ほか



イメージ統一を図った。

同時に、公園という都市施設にグリーンインフラの思想を加えていくことに努めた。グランモール公園の再整備は「環境未来都市・横浜」のリーディング事業のひとつでもある。貯留砕石路盤の積極的導入に保水性舗装や水景施設を組み合わせ、大きな水循環の仕組みを公園の中に構築した。雨水は浸透側溝から礫間貯留の砕石路盤に保水され、舗装や植物から蒸発散されるという大きな水循環が生み出されている。さらに、パイプメントはもとよりグレーチングのパターンやファニチャー、従前の照明施設の再利用を含めた光の演出などにも、統一して水循環の仕組みを表現し発信していくことに努めた。

作品評

本作品は、1989年に供用された横浜市のみなとみらい21地区の大規模歩行者軸の再整備である。供用から4半世紀が過ぎたこと、周辺建築物が竣工したこと、等から今回の全面見直しとなったものである。応募者は5年前の再整備基本計画をプロポーザルで受託し、昨年度にオープンとなった。この間、市や関係者との様々な協議を進め、何よりも将来につながる全長に亘るグリーンインフラを実現した。舗装面の温度低下、排水施設の軽減、植栽基盤の確保、灌水量の軽減、等の様々な効果が期待できるグリーンインフラの導入により、緑の歩行者軸が鮮明に蘇った。また、夜光虫ベイブや美術館前水面といった過去の遺産も十分に引継ぎ、新時代に対応できるように再生している。波紋状パイプの導入や港を意識したファニチャー類等、全体に工夫が行き届いており、その総合力が評価された。